

全国病児保育協議会のホームページ <http://www.byoujihoiku.ne.jp>

全国病児保育
協議会
広報委員会

病児保育協議会ニュース



=今号の目次= 第18回研究大会・総会特集	
1頁 協議会メール 第18回研究大会を終えて	7頁 なんでも相談報告 「施設タイプ別」
2頁 基調講演まとめ	8頁 「その他」 研修委員会報告
3頁 行政説明まとめ	初めての「事例で学ぶ基礎研修」を振り返って
4頁 特別テーマ企画まとめ 特別講演IIまとめ	9頁 調査研究委員会報告 インシデントレポートシステム研修会を終えて
5頁 分科会報告 「マネージメント全般」 「病児保育と育児支援」	10頁～12頁 第18回全国病児保育協議会総会議事録
6頁 「地域の取り組みと連携」 「保育看護、その他」	

協議会メール

第18回全国病児保育研究大会(三重)を終えて

第18回全国病児保育研究大会 会頭 熱田 裕



平成20年7月20日(日)・21日(祭)の両日に、三重県四日市市文化会館に於いて第18回全国病児保育研究大会を開催いたしました。

今年はいよいよ台風は免れたものの、連日猛暑が続いている中を開会式から1階の会場の席がほぼ埋まるほどの盛況でした。

開会式は、先ず全国病児保育協議会会長木野稔先生の挨拶、第18回全国病児保育研究大会会頭熱田裕の挨拶に引き続き、三重県知事野呂昭彦様、及び四日市市長井上哲夫様に心温まる祝辞をいただきました。

今年度から病児・病後児保育が再編・強化され、子どもの状態に応じて「病児保育型」「病後児保育型」「体調不良型」の三つに類型化され運用されるようになりました。しかしながら、このことにより私達の病児・病後児保育の取り組みや目的が変わるものではありません。専門集団として、最善のケアを行って病気になった子

もたちの健康と幸福を守って行きたいと思っております。そのためには、私たちは日々の事業運用に努力しつつ、自己研鑽を積む必要があります。この研究大会がその一役を果たすことが出来たと思っております。

大会初日の講演は本会顧問の帆足英一先生による基調講演「究極の子育て支援 病児保育の意義と課題」について話をさせていただきました。引き続き「事例で学ぶ基礎看護Ⅰ」をいなみ小児科病児保育室ハグルームの稲見誠一先生と「事例で学ぶ基礎看護Ⅱ」を城東こどもクリニック病児保育室ことりの森の赤平幸子先生より実践的な心得についての話がありました。

午後には厚生労働省保育課課長補佐の陞本英俊様より「保育行政の動向と課題」について話があり、「病児・病後児保育」は担当課が母子保健課から保育課に移って再編強化され、保育事業の中で実施されること等の説明がありました。

大会の特別企画テーマとしての「手をつなごう」は二部構成で行い、第一部は人材育成コンサルタントの三好良子様「子育て

Enjoy能力のすすめ」について、「子育て・人育て」の極意を楽しく話をさせていただき、第二部では「それぞれの立場から」と題して4人のパネリストによるディスカッションがありました。その中で、ひとつひとつの子育て支援事業が別々に活動するのではなく、お互いに手を取り合って、セーフティネットの網の目をより細かく・強固にして、子育て支援をする共通認識を深めることが出来ました。

次に総会が開催され、全国病児保育協議会の定例の報告がおこなわれ、次期会長には木野稔先生が留任されることに決まりました。

また他会場に於いては、保育実習Ⅰ、調査研究委員会Ⅰ、ポスター発表Ⅰ～Ⅲ及びお薬なんでも相談



が行われました。

午後7時から交流会が会場の近くにある四日市都ホテルで行われ、三重県の来賓を代表して三重大学大学院医学系研究科病態解明医学講小児発達医学分野教授の駒田美弘先生の挨拶に続き木野稔会長の乾杯で始まり、伊勢らしさを出した「雅楽」の演奏・舞を主にして、クリクラウンの紹介と、皆で「わ」(和&話&輪)になってダンスをして大いに盛り上がり、次期開催地の千葉県に引継ぎをいたしました。

2日目は猛暑の中を多数の出席があり、先ず特別講演として三重大学大学院医学系研究科病態解明



医学講座小児発達医学分野教授駒田美弘先生には「子どもたち中心の医療を考える」と題して、今迄の医療は、その多くが医療者中心の医療であったが、現在の医療では、他職種の連携によるチーム医療の実施、医療環境の整備、患者権利の重視、心理的サポートなど、子どもの目線に立った患者と家族を中心とした医療が求められ、それを実践している主に小児ガンの医療現場に於ける現状について、心に残る話をしていただきました。次いで教育講演I「子どもの育ちと環境について」を武庫川女子大学文学部教授河合優年先生に講演をしていただき、子どもの発達にとってはより良い環境作りを大人がすることの必要性を話されました。

同時に、他会場では保育実習II、調査研究委員会II、何でも相談IIIが行われました。午後は分科会I~III、及びポスター発表IV~Vで活発な発表がありました。

大会最後の講演として教育講演+ステップアップ研修として国立

感染症研究所感染症情報センター第1室長の谷口清洲先生に「病児保育施設における感染症対策」の題で話をさせていただき、院内感染症対策は基本に忠実に、かつ小児の特性をふまえた上で実施することが必要であることを力説されました。

また、全国病児保育研究大会としては初めての企画として、一日目は「乳幼児ぜんそくのケア」について国立病院機構臨床研究部長藤沢隆夫先生に、二日目には「乳幼児の予防接種」について国立病院機構三重病院名誉院長神谷齊先生にランチョンセミナーで講演をしていただきました。

おわりに、この大会には669名の多数の参加者があり、盛会に終えることが出来ましたことは、全国病児保育協議会の常任協議員の皆様、御講演をいただいた講師の先生、御協力いただいた関係者の皆様、実行委員会及びボランティアの皆様の御協力の賜物であり、心より感謝を申し上げます。

基調講演まとめ

「究極の子育て支援」-病児保育の意義と課題-

講師：全国病児保育協議会

顧問 帆足 英一 先生

報告者：大分こども病院キッズケアルーム

藤本 保



今年の基調講演では2つの重大な話題があった。

一つは、大きく変わった新たな「病児・病後

児保育」制度についての解説であり、その問題点を指摘するなかで、先生の憤りが鮮烈に伝わってくる内容であった。

他の一つは、病児保育の質を如何にして高め維持していくかとのことで、今後の病児保育協議会の課題を示す内容であり、協議会はどのような方向性を持つべきかとの指摘であった。その要旨を以下に示す。

先ず、プログラム・抄録集にあるように病児保育の歴史を詳しく

説明した。事業名が次々に変わり、今年度からは「病児・病後児保育事業」となり、厚労省の主管課も母子保健課から保育課へ移管されたことが示された。

平成19年で取り入れた「保育所自園型」は廃止され、病児対応型、病後児対応型、体調不良児対応型の三種類に体系化されたこと、事業補助もいわゆるソフト交付金から児童育成事業費補助金(特別会計)に変更され、国の直轄となったことが示された。

新たな制度の特徴として、定員4名に対して専任スタッフは看護師1名、保育士2名が必要なこと、補助金額は「病児対応型」848万円(定員4名)、「病後児対応型」679万円(定員4名)、「体調不良児対応型」441万円(定員は

看護師1名に対して2名)となったこと、病児対応型と病後児対応型の補助金額の差(約140万円)は医師手当てであることが説明された。

また、最も重要な問題点として保護者負担(利用料)が事業費の半額相当を想定されているとのことで、今までの概ね2000円が崩れて高くなると利用しにくくなり、育児支援の基本理念から遠くのではないかと懸念が示された。

これらの問題点と課題に関しては、是非もう一度、抄録集に眼を通して理解を深めて欲しい。

保育看護の専門性向上については、スタッフ各自の努力はもとより、協議会として研修委員会、調



査研究委員会の活動に期するものが大きく、研究大会での発表や研修会の充実が図られねばならない。安心と安全の確保は非常に重要であり、リスクマネジメント、セーフティマネジメントの徹底を図ること、そのためのシステム作りと研修の機会増大の必要性が強調された。

協議会の使命として、これら質を担保することの機会を提供し、その習熟度に応じた評価が必要であり、従来の自己評価から第三者評価へ、そして一定の水準に達していれば協議会として認定するような制度を創設する時期に来てい

ることが力説された。「協議会認証施設」等の認定を行なうには、協議会がそれなりに社会から認知されておく必要があり、任意団体では何ら効力もないので、今後、協議会は法人化に向けて具体的な行動をしていくべきであると総括した。

行政説明まとめ

「保育行政の動向と課題」

講師：厚生労働省保育課

課長補佐 陞本 英俊 先生

報告者：全国病児保育協議会

会長 木野 稔



講師の陞本先生

ため、本研究大会では初めて保育課から行政説明があった。

保育課らしく、保育所の現状について待機児童数の現状と対策や家庭的保育事業の充実、多様な保育サービスの実施状況などから詳しく説明があった。年々保育所数、保育所利用数を増やしているが、まだ0歳児を主にして1万8千人ほどの待機児童数があり、平成21年度までには保育所受け入れ児童数を215万にまで増やすことが最優先課題ということであった。

一方、多様な保育サービスについては、子ども子育て応援プランにおける平成21年度での目標数が定められており、休日保育などは目標が大きすぎるが、病児病後児保育は目標の1500を目指すとのことであった。



また、今回の病児病後児保育再編にいたる背景としての、国の少子化についての考え方の説明があった。平成19年12月の「子どもと家族を応援する日本」重点戦略においては、働き方の改革による仕事と生活の調和（ワークライフバランス）と親の就労と子どもの育成の両立および家庭における子育てを支援する枠組みの構築という2つの取組を車の両輪として進めることが必要とされている。

しかし、必要な追加所要額として1兆2千億～2兆4千億とされているが、これは消費税1%分に当たり、到底今の政治状況では間に合うものでない。また、平成20年5月の少子化対策特別部会とりまとめでは、保育サービスの量的拡大とともに質の維持・向上をうたっている、そして費用負担については、地方負担や企業事業主負担および利用者負担まで踏み込んだ議論が必要としている。

質の向上を維持するには、子どもの目線に立つことが重要であり、保育は単なる預かりではなく、子どもがその場で健全に育つものでなければならない、保育の場では専門的職員配置で親代わりの能力を発揮する必要があると強調された。これらの考えは、病児病後児保育にも通じ、我々協議会が主張してきた子育て支援の考え方も合致するものである。

さらに、病気の時は子どもが一番弱っている時であり、看護師や保育士、栄養士などのさらに専門



的職員の手厚い配置が必要で親以上の能力が必要でセーフティネットも欠かせないと言われた。ここまでの論旨も我々の主張と同様であるが、このような考えの元では定員が6名以上の大規模の施設は考えられず、親がどうしてもできない部分を手当てするのみであると言われたところ位から、病児保育現場の実情と明らかに食い違ってきている。また、体調不良児型の場合は、全保育所に看護師を配置するための予算獲得のテクニックであると正直に述べられただけに、国の方針を十分理解できない地方行政に翻弄されながら、子育てをめぐる問題や子どもや親の切実な願いに直面している現場とのギャップを感じてしまった。

時間の余裕がない中で2つの質問を受けた。一つは、体調不良児型での看護師配置基準に関するもので、上記のように一般保育所に看護師を配置する目的で考えてほしいと繰り返された。次に、定員と1000名以上の利用数についての考え方への質問には、大規模は想定していないと明言された。

親の都合と施設の経営上のことを優先した考えであり、子どもの視点から外れているという論旨と思われるが、地域におけるニーズと病児保育運営の特徴を考慮しない暴論と言っても過言でない。これまで、国として十分な補助もなく、本事業の特殊性への配慮もなかった経緯を再確認した上で議論すべきと思われた。

特別テーマ企画まとめ

「手をつなごう」
I 「子育て Enjoy 能力のすすめ」
 講師：産業能率大学講師 三好 良子 先生
II パネルディスカッション「それぞれの立場から」
 報告者：全国病児保育協議会 副会長 池田 奈緒子



講師の三好先生

今回の三重大会のメインテーマ「手をつなごう 病児保育と共に」に基づいて設定された特別テーマ企画「手をつなごう」は、二部構成で開かれました。

第一部は「子育てEnjoy能力のすすめ」と題し、日本GWT(グループワークトレーニング)協会理事長 三好良子先生にご講演いただきました。

三好先生の講義は、パワーポイントではなくホワイトボードに板書でなされ、時には聴衆も参加してのとても楽しい講演でした。

現代の子育てキーワードは、KDDIならぬKKDDI=経験、勘、度胸、土壇場、いい加減との事。1対3の法則について。「分かる」「できる」が、実は「わかっている・できているつもり」で「傍目」からは違うのだという事。プレッシャー・ストレス・トラブル「に」負けないようにではなく、それら

「で」元気になるように。EnjoyとはEn(=入れる)+joyから、今やっている事他で楽しむのではなく、今やっている事にjoyをen=入れて楽しむのだと教えて下さいました。

第二部は「それぞれの立場から」と題し、多方面の方々の発表でした。

企業からは渥美由喜氏により「先進国における病児保育の取り組みと日本企業における新たな潮流」。時間の関係で前者は割愛となりましたが、中小企業500社をまわって得た、ワークライフバランスの波及について説明して下さいました。

行政からは森田美貴氏により「四日市市における子育て支援の現状について」。四日市市における虐待の現状をご説明下さいました。虐待はいつでもどこでも遭遇する可能性があるの、とにかく気づいたら1保育士の直感を大切に 2複数の視点で見て 3園全体で決定し通告、判断は専門家に任せて下さいとの事でした。

家庭視点・在宅ケアからは多湖光宗氏により「病児保育と病児の在宅ケア・家庭支援」。幼老の統合ケアの説明をして下さいました。認知症老人の行動障害「くりかえし」は、褒め続けられる、同じ事を教え続けられる等、子どものしつけに応用できる。互いの支え合いが大変により効果を挙げている写真などをたくさん紹介して下さいました。「一人で歩けば徘徊、皆で歩けば散歩、腕章つけばパトロール」という写真には思わず笑いと拍手がおきました。

市民活動からは田部真樹子氏により「みえ子育て支援緊急サポートネットワーク事業から」。三重県での様々な取り組みを紹介して下さいました。18歳までの子どもの声を受け止める「チャイルドライン24」での根本は、指示しない・指導しない・傾聴するという事、今は条件付き愛しか受け取っていない子どもたちにどう向かうか、を教えてくださいました。

これらいろいろな方向からのお話は、最後に「それぞれの立場から、自分には今何が出来るのか、の一步を踏み出していくことが大切」という言葉で締めくくられました。

病児保育は、いろいろな地域でさまざまな取り組みがなされています。形態、やり方はそれぞれの地域・条件・その他によって違いがありますが、「子どもたちのために」という同じ目的のために、互いを知り・認め合い、手を取り合って進めていかれたら…、本当にいい企画でした。

特別講演II まとめ

「病児保育施設における感染症対策」
 講師：国立感染症研究所感染症情報センター 谷口 清州 先生
 報告者：医療法人徳洲会 八尾総合病院 神原 雪子



講師の谷口先生

子どもの病気の大半は感染症で、みなさんの病児保育施設もお預かりする子どもはほとんどが感染症だと思

います。病児保育は手厚いケアが特徴ですが、やはり集団保育であり、感染の問題は避けては通れないものです。谷口先生は国の感染症研究の要にいらっしゃる方で、病児保育にとって重要な問題である感染対策についてご講演いた



きました。

感染症は伝播するには経路があり、空気感染(同じ空気を吸うだけでうつる。例：はしか・みずぼうそう・結核)・飛沫感染(咳やくしゃみなど病原体が飛ばされてうつる。2m以上離れていれ

つる可能性は低い。例：多くのかぜ）・経口感染(口から病原体が体内へ侵入する)・接触感染(接触してうつる。例：とびひ)などがあります。

標準予防策として、一番大切なのは『手洗い』です。仕事の前後、児に接触した後、おむつ交換後、吐物や汚物の処理後などは必ず手洗いしましょう。〈手洗い励行〉また感染のリスクのあるものやその場所から身を守る方策をとることで、病原体の侵入をふせぐことができるので、予防する側がマスクやガウン、手袋などを着用することで効果が期待できます。

ガウンやアイシールドはしぶきが飛びちったりして皮膚が汚染されるのを防ぐのに有効です。また手袋も有効ですが、着用していても、はずした際に13%に手指汚染があったそうです。そこで手袋

をしていても手洗いしないと防御になりません。

自分を守るのと同時に、感染している児が他の人にうつさない様な工夫も必要です。‘Cover your cough、咳をしているならマスクをさせましょう。うつる可能性が高い場合に『隔離』を行います。『隔離』は感染経路の予防+標準予防策をしてから行います。

予防をする際に、病気の特徴を知ることが必要です。例えばはしか(麻疹)はかなりつよい感染力をもっており、また空気感染するため、人にうつる確率が高くなります。ある病院では成人のはしか患者がしらずに集団の待合で待っていたところ、25分間の間に同じ空間にいた予防接種をしていない幼児4人が発症しています。かといって、他の感染症もそこま

で注意が必要かというところではありません。病気によって感染のつよさ、経路などがちがうので、それを考慮して予防を考える必要があります。

病児保育施設として、事前を知っておきたい情報としては、①地域の流行状況(サーベイランスなども有用) ②児のワクチン歴 ③入院歴などの今までの既往歴があげられます。これらを参考に感染の予防・隔離を考えるといいと思われます。

しかし何をもって一番大切なことは、『手洗い』だと強調されていきました。児を守ることも重要ですが、保育看護を提供する側のスタッフそして自分を守ることも重要です。感染を防ぐ、拡大させないために、この講演はとても参考になったのではないかと思います。手洗い励行!



分科会報告



■ 分科会Ⅰ「マネージメント全般」 ■

座長：ますだ小児科病児保育室バンビ

増田 宏

「利用しやすい病児保育施設となるために」

クリニックの休診日も利用可能とした。保育士を増員し、施設の改修により部屋を増設した。さらに、朝夕の延長保育をはじめた。利用希望者を断る件数を減らすことで、利用者の増加がみられた。

「病児保育室利用率向上への試み」

「念のため予約」の方のキャンセル率を調査した。医師が翌日の利用は不要と考えた児のキャンセル率は83.4%であった。念のため予約2名につき1名のオーバーブッキングを開始した結果、定員確保が向上し、利用者の増加につ

ながった。

「情報共有ツールとしての電子保育記録システム」

保育記録を電子化し、電子カルテと連動したシステムを作製し実用化した。診療所のカルテの内容が保育士により確認可能であり、逆に保育記録を見ることで医師が保育室に行かなくても児の状態を確認することが可能になった。

事務では、予約、キャンセル待ち、キャンセルなどの把握が容易になった。保育士によるデータ入力力が簡単にできるように、シンプルな入力方法を採用した。保育記録を標準化することにより、保育士の観察、判断する能力の向上に

つながると考えた。

「当院病児保育室におけるヒヤリハットの検討」

ヒヤリハット事例のうち、転落・転倒に関するものと与薬に関するもので全体の半分以上を占めていた。SHELモデルで分析を行い、保育室内の構造の問題が明らかとなり、危険箇所の改善が必要なことと、「与薬マニュアル」の作成が必要であることがわかった。



■ 分科会Ⅱ「病児保育と育児支援」 ■

座長：中野こども病院

園府寺 美

「病児保育と育児支援」で括られた5題のうち3題がアンケート調査で、膨大な量の情報をうまくまとめて実態を示されました。

さて、その結果からどうアクションをおこすか、たくさんの課題が出てきたと感じています。

感染予防についてはどの施設も

頭を悩ませているところで、多数の施設の現状を知ることができました。施設の規模やスペースによって全く同じとはいえないでしょうが、この調査結果を踏まえて(1)最低限必要なこと、(2)望ましいことなど指針を作り、全国的なレベルアップを図る方向に進めてほしいと思います。

また、いずれの演題からも病児保育のあるべき姿は「育児支援」であると改めて認識させられました。

仕事を休める・休めないに関わ

らず、病気の子どもたちをどう見たらいいのか、手を差し伸べてほしいと願っている保護者は多く、医師、看護師、保育士と家族とがうまく手をつなげる契機となれ

ば、病児保育の意義もさらに大きなものになるはずですよ。

それをもっと対外的にアピールしていきたいものです。

分科会III「地域の取り組みと連携」

座長：さとう小児科医院 病児保育室バンビーノ

佐藤 里美

この分科会では地域での取り組みと連携についての5題でした。

レインボーキッズの三好先生は地域子育て支援センターとの連携について、こどもケアハウスぞうさんの伊藤先生は、ファミリーサ



ポート、緊急サポートとの連携について、すずらん病児保育園の平林先生は病児保育室で行う保健活動について報告されました。

多職種が連携をとり、育児不安の軽減、家庭保育・看護に役立つ知識の普及といった活動を展開されていました。

病児保育室が病児の保育にあたるだけでなく、地域の子育て支援の重要な部分を担うことができることを示されました。

また地域の特性を生かした活動報告として、バンビーノの佐藤先

生からは、千葉市嘱託医部会を通して見えてきた保育所との関係についての報告でした。保育所と病児保育室各々が持つ役割について相互理解を深めること、そのためには、保育所嘱託医が果たす役割も重要であることを強調されました。

よいこのもりの佐藤先生からは、新潟市における病児保育情報システムネットワークの稼働についてでした。面倒な紙ベースでのデータ管理をネットワーク化することで、行政との連携を密にし、利用者のサービス向上を図った報告でした。

いずれの演題も各地域での活発な取り組みの様子が伝わってきました。

分科会IV「保育看護、その他」

座長：トビウメ小児科医院附属病児保育室子どもの家

飛梅 薫

①”ことりの森”から2題発表された。身体的・精神的ストレスを抱えた病児の行動から心のサインを読み取り、1対1の対応によって情緒不安が解消できることを体験した結果、ゆとりのある人の環境の重要性が強調された。

②”大分こども病院キッズケアルーム”では特にストレスを感じていると思われる子どもは粘土遊び、ままごと、塗り絵などの能動的な遊びを選択する傾向があ

り、短期保育である病児保育でも能動保育が有効であることが示された。

③”練馬区医師会”では”エンゼル多摩”に次いで全国2番目の医師会立の単独型施設を設立した。医師が常駐しないデメリットがあるが、IT-TVの利用によって担当医が保育状況を確認できるシステムが構築されている。今後複数参加型施設の増加が予測される。



④医療機関では自院施設内に保育室を設ける場合が多いが、必ずしも十分な広さを確保できない。”鈴木小児科医院”は100mほど離れた所に民家を購入して保育室にあてた。部屋数が多く確保できるので感染症対策に有効であると強調された。

なんでも相談報告

なんでも相談II「施設タイプ別」

座長：おおた小児科循環器科病児保育室ミルクー

太田 文夫

この度「なんでも相談2」の座長兼コメンテーターを務めさせていただきました。事前質問がなかったため、会場に誰も来てくれないのではないかと不安でした。

午前中の座長打ち合わせで福岡

の平田さん、八戸の沢口さんと、医療機関併設型、保育所併設型と立場が異なる施設の運営方法の違いや、預かった子供の扱いなどについて2時間近く楽しく意見交換ができましたので、自分たちだけ

の「なんでも相談」は十分にでき



ました。もし来場者が少なくても、これだけでも収穫ありとすればいいかと開き直っておりましたが、開始時には会場の半分近く



が埋まる状況となり安堵いたしました。

質問も医療施設併設型、保育園併設型、乳児園併設型それぞれに出していただき、その内容も、開設時間、労働時間、キャンセルの扱い、予約方法、医療機関との連携など多岐にわたり、回答もコメンテーターからだけでなく会場に来た参加者が、自らの体験談や工夫を積極的に出してくださり、とても盛り上がった相談会となりました。

質問者は、日頃悩んでおられる

切実な事情を出してくださいましたが、それぞれについての的確でまた示唆に富む内容の回答が次々と出ておりました。近隣に相談や連携の取れる施設がある所では簡単に解決することでも、こういった場を利用して情報を得る必要のある方達もたくさんいらっしゃるといふ事実も分かりましたし、日頃の連携(施設間、行政と、周辺医療機関となど)の重要さを再認識させていただいた相談会でもありました。まあ、無事に終了してホッとしております。

■ なんでも相談Ⅲ「その他」 ■

座長：なずな病児保育室

前田 敏子

なんでも相談Ⅲで進藤先生・浜本先生とともに、コメンテーターをさせていただきました。分科会は「感染症どこまで隔離するの?」という質問から始まりました。手足口病・ヘルペス・アデノ・ヘルパンギーナ・ロタ・RS・インフルエンザなど、日常ありふれた疾患で隔離は望ましいけどお部屋のこともあってどうしようという現場よりの問題提起でした。

さらに細かく、インフルエンザA・Bを一緒にする?タミフルを内服している子が異常行動をとるかもしれないけどどうするの?ア



デノで発熱のみの子はどうするの?RSは幼若乳幼児が罹患すると重症化するが、年長児だったら大丈夫けどどうする?インフルエンザの流行期に発熱後時間の経過していない子がきたらどうする?兄弟がインフルエンザで、熱発した子がきたらどうする?という質問まででした。

答えは各保育室によって違っており、いろんな意見を参考にするほかに難しい悩ましい問題です。

つぎは保育士の休憩時間確保の問題を話し合いました。時間外労働が全くなく、休憩時間も充分確保されているところから、忙しい時は休憩時間であっても、休憩時間を返上して保育しながら食事をとっているところや、もともと休憩時間はなく、保育児が入眠している時間のみ室内で休憩のところもありました。

あるいは看護師の休憩時間確保のために雇用されているかたもあ



り、保育がなければ仕事もない厳しい労働環境を言及されるかたもありました。保育士の一層の待遇改善を望む声や経営努力を望む意見がだされました。

最後に、今春の厚労省の病児保育再編にたいして、施設改善の補助金助成など全国保育協議会のほうから強く要請をしてほしいとの意見ができました。その場で池田副委員長よりの回答もありましたが、参加者はそれぞれ、厚労省の姿勢にたいしある種の危惧をだき、ある種の期待をしているようでした。

全国保育協議会にたいしても厚労省への積極的な働きかけを希望して盛会な分科会の終了となりました。

▶▶▶▶▶ 研修委員会報告 ◀◀◀◀◀

初めての「事例で学ぶ基礎研修」を振り返って

全国病児保育協議会研修委員長 南 武嗣

1、「事例で学ぶ基礎研修」に一定の評価

3月に事前に問題集を配布し、基礎看護、基礎保育ともに200名以上の会員の皆様から解答をい

ただき本当にありがとうございました。この結果をもとに、基礎看護のⅠ総論、Ⅱ各論、基礎保育のⅠ総論、Ⅱ各論と、保育看護、病児保育総論の6題の基礎研修が行われました。

アンケートの結果、「事例で学ぶ基礎研修」全体に対し、大変良いが22%、良いが60%と合計82%の方から良いという評価をいただきました。また個々の講演についてもそれぞれ印象に残ったと評価をいただきました。

「事例で学ぶ基礎研修」には2つの目的があります。①難しい言

葉ではなく事例をつかい実際の場面を思い浮かべながら看護や保育の基礎を学ぶこと、②講師が一方的に話すのではなく、問題をあらかじめ配布しておいて会員の皆様と解答を考える双方向性の研修を行うことでした。

初めての試みでしたので、問題の内容、作成や解説など、不十分な面もあったと思います。アンケートの自由記載欄にも様々なご意見が寄せられていました。これらのご意見も参考にしながら、来



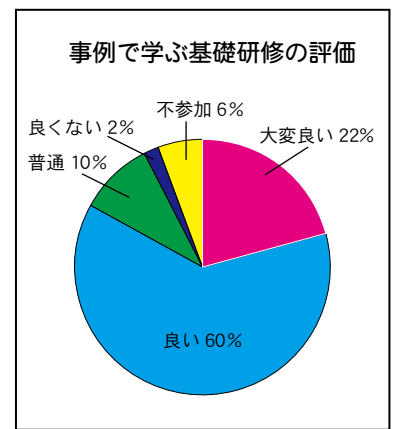
年はさらに進化した「事例で学ぶ基礎研修」を企画していきたいと思えます。

2、全国大会に変化のきざし

昨年の全国大会は初参加の方が70%ぐらい、勤務年数が1年未満の方も多かったのですが、今年の三重大会では初回参加の方が45%、勤務年数も1年未満が22%と減少、3年以上という方が47%も参加され構成が変わりつつあるようです。

これは病児保育施設が全国的に定着しつつあり経験を積まれた方が参加されていること、これまで全国大会が開催されてきた関西地区に隣接して開催されたことなどの要因が考えられます。

アンケートの自由記載からは、基礎研修だけでなくステップアップ研修の充実、参加型、実習型の



研修、問題をお互い話し合えるワークショップ型の研修などの希望がでてきています。変化しつつある全国大会と参加される会員のニーズにあった研修へ進化していく必要性を感じました。

今後とも研修委員会へのご助言とご協力をよろしくお願いいたします。

▶▶▶▶▶ 調査研究委員会報告 ◀◀◀◀◀

インシデントレポートシステム研修会を終えて

全国病児保育協議会調査研究委員長 深谷 憲一

全国の病児保育施設数の増加に伴ってリスクマネジメントの標準化が望まれる中、このシステムの導入による利用者信頼度の高い安全な病児・病後児保育の実現を願い、今年も研修会を開催させていただきました。

昨年100名以上の参加者に対し、今年は40名前後(ほとんどが初の参加者)と小規模ながら、内容は倍以上の濃さがありました。

今年初の試みは、調査研究委員会監修で制作したインシデント例題のビデオを見て、実際にインシデントレポートを作成することで、レポート作成に当たっては新たなツール(インシデントレポート作成支援ツール)も提供させていただきました。

計2日間の研修会で内容も多岐に渡ったためハードルは高かったと思うのですが、参加された皆さんは誰一人脱落することなく、リスクマネジメントに対する皆さんの意識の高さを感じると共に、研修会担当者としては大変喜ばしく感謝いたしております。

アンケート結果をいくつかご紹介いたします。

「活用できる様になると、より良い看護保育が出来るしいろんな気づきが出来て、生かしていけると思えます。」「リスクマネジメントに大変役立つ内容でした。」「もっと繰り返し受けて理解を深めたい。」「ビデオを見ての実習、とてもわかりやすかったです。」「今回の参加で、職場の改善点が少し見えてきましたので、早速対策を立てるべき所、改善すべき点を上げて対処していきたいと思えました。」「客観的に分析する事で、明確にチェックできて良かった。又、その後の改善・解決が一番の大切な事でこれからの病児保育にいかしていきたいと思えました。」と好評な意見もありました。

しかし一方で、「類別が出来ていないインシデントが起きた場合の処理を考慮する必要があると思う。」「短時間で理解するのは少し難しいと思う。」「資料が多く、どれ?と思うことがたびたびありました。できれば分かりやすくひとまとめにさせていただくと分かりや



すいです。」「今現在、現場でインシデントレポートを使わせていただいているのですが、項目がなかなかあてはまるものがなかったりよくします。こまかすぎると、少し使いにくいのかなと思います。もう少しおおまかな項目内容でもいいのかなと感じるのですが。」「短時間ということもあるので仕方ないかもしれないが流れが早いので今回から参加の人には難しいのではないのでしょうか?」などの意見より改善すべき問題点も見つかり、今後の研修会の進め方に方向性を見出すことのできた有意義な機会となりました。

調査研究委員会では、今後もこのシステムの熟成と普及を目指して努力したい所存ですので、よろしくお願いいたしますのほど申し上げます。

第18回全国病児保育協議会総会議事録

日時：平成20年7月20日(日) 17:10～18:00

場所：四日市市文化会館

一、会長挨拶(木野稔会長より)

一、仮議長および議事録署名人選出

仮議長として熱田裕会頭、および議事録署名人として浜本芳彦先生と杉本照子先生を推薦。

◆拍手で承認された。

一、仮議長による議長選出

会場より立候補者がおらず、二井立恵先生を推薦。

◆拍手で承認された。

一、木野運営委員長より総会成立の説明

現在の加盟施設は414施設。総会に参加する施設は68施設、委任状を提出した施設は209施設、計277施設になる。これは全施設数の過半数を超えており、総会は成立する。

一、議事

(1)平成十九年度事業報告

運営委員会(木野稔委員長より)

- ・平成19年7月14日(土)
運営委員会(福岡国際会議場)
 - ・平成19年7月14日(土)
常任協議委員会(福岡国際会議場)
 - ・平成19年12月23日(日)
運営委員会(八重洲ダイビル)
 - ・平成20年3月20日(木祝)
常任協議委員会(八重洲ダイビル)
- 平成19年度年会費納入状況・マニュアル販売状況(木野稔委員長より)

入会金330,000円(入会施設32施設・準会員5名)、事業年会費9,001,000円(377施設・準会員25名)、賛助会費540,000円の納入があった。年会費は平成18年度が12施設、平成19年度が29施設未納となっている。必携・新病児保育マニュアルの売上冊数は684冊、10年のあゆみの売上冊数は74冊であった。

研修委員会(南武嗣委員長より)

- 第1回 平成19年7月14日(福岡市)
福岡大会の研修部門の進行・記録、アンケートなど
- 第2回 平成19年9月9日(東京都)
三重大会へ向けて事例で学ぶ基礎研修の準備
- 第3回 平成19年12月23日(東京都)

三重大会へ向けて事例で学ぶ基礎研修へ具体的な計画、症例問題と参加型の仕組みの検討
運営委員会 平成19年12月23日(東京都)
事例で学ぶ基礎研修の進捗状況を報告
第4回 平成20年3月20日(東京)
三重大会へ向けて事例で学ぶ基礎研修の講師の最終的な打ち合わせ
保育看護、病児保育総論、なんでも相談などの詳細検討

調査研究委員会(深谷憲一委員長より)

(1)委員会開催

第1回調査研究委員会(平成19年7月14日)

議事：①第17回研究大会における調査研究委員会研修会について

研修会シュミレーションと各委員の役割分担等

第2回調査研究委員会(平成19年12月2日)

議事：①第18回研究大会における調査研究委員会研修会について

研修会内容の決定と準備スケジュール等

第3回調査研究委員会(平成20年3月20日)

議事：①第18回研究大会における調査研究委員会研修会について

研修会の準備スケジュールと中間報告

②平成15年度、平成17年度調査の統合と論文発表について

病児保育ニーズにおけるキャンセル傾向の考え方について

報告：①関東ブロック会分科会(インシデントレポートシステム研修会)の内容報告

(2)調査

I.「平成17年度病児保育事業実態調査」

分析方法の見直しと平成15年度調査との統合により再分析

(3)研究事業

I.病(後)児保育リスクマネジメントパイロット調査

インシデントレポートシステム研修会開催を通じての啓蒙活動

広報委員会(神原雪子委員長より)



- ①病児保育ニュース発行(年5回)各施設紹介、支部研修会紹介など
- ②ホームページ関連
 - 月1回をめどに更新
 - 病児保育ニュース(バックナンバー)、厚生労働省の通達などの情報を掲載
- ③病児保育ポスター完成
- ④研究大会での広報の部屋を開設:病児保育についてのマスコミの紹介記事(テレビ・新聞・雑誌など)を展示、各施設のパンフレットなどの紹介
- ⑤委員会の開催
 - 平成19年7月14日 福岡
 - 平成20年2月10日~11日 三重
- ⑥機関誌発行にむけての編集委員会準備委員会として活動



◆常任協議員および委嘱常任協議員案について拍手で承認を得た。

(2) 平成十九年度決算報告(木野稔運営委員長より)

平成19年度決算について 予算対比増減に対する説明

収入の部については、予算作成時の予測よりも多くの施設から納入があったこと、また、マニュアル・テキスト等の販売が好調だったこと等により当初予算を約220万上回る22,005,724円であった。

支出の部については、マニュアル増刷が今期にずれこんだこと等もあり、予算を200万下回る10,934,061円となっており、よって繰越金は当初予算を約420万上回る11,071,663円となった。

全国病児保育協議会 平成19年度決算報告

11ページに掲載の決算報告書を参照

(3) 監査報告(向田隆通監事より)

会計帳簿および関係書類を監査した結果、正確であることを認め、収入・支出および決算処理、平成19年度事業は適正に行われていることを証明いたします。

◆平成19年度事業報告ならびに平成19年度決算報告が、拍手で承認された。

(4) 平成二十年度役員選出(木野運営委員長より)

今回の総会をもって役員の任期が満了となり、役員改選となる。そこで常任協議員および委嘱常任協議員案を上程する。

●常任協議員:青木佳之、池田奈緒子、稲見 誠、神原雪子、木野 稔、杉本照子、遠山法子、羽根靖之、原木真名、深谷憲一、福富 悌、藤本 保、前田敏子、松本一郎、松本良文、南 武嗣
計16名

●委嘱常任協議員:赤平幸子、佐藤里美、庄司順一、野原八千代、平田ルリ子、藤本文孝、帆足暁子
計7名

木野運営委員長より新役員について報告

承認を得た常任協議員および委嘱常任協議員から新役員を決定したので報告する。

- 名誉会長:保坂智子
- 顧問:帆足英一
- 会長:木野 稔
- 副会長:池田奈緒子、稲見 誠、原木真名
- 監事:二宮剛美、宮田章子
- 運営委員長:木野 稔
- 調査研究委員長:池田奈緒子
- 研修委員長:南 武嗣
- 広報委員長:神原雪子

◆上記提案について会場より拍手で承認を得た。

(5) 平成二十年度事業計画

運営委員会(木野運営委員長より)

- 1.協議会の将来構想(法人化など団体としての方向性、会則規約改正など)について
- 2.支部会組織の充実と支部活動の活性化について
- 3.創立20周年記念事業の内容検討

上記案件を中心課題として、運営委員会を平成20年7月と11月または12月に、常任協議員会を平成20年7月と平成21年2月または3月に開催する予定。

研修委員会(南 武嗣委員長より)

第1回 研修委員会 平成19年7月19日(四日市市)
三重大会の研修部門の進行・記録、アンケート調査など会議予定

第2回 平成20年9月ごろ 三重大会の反省、研修プログラム・テキスト、記録集の検討
千葉大会へ向けての計画、基礎研修の今後のあり方など

調査研究委員会(池田奈緒子委員長より)

(1) 委員会開催

第1回 調査研究委員会(平成20年7月19日)
議事:①インシデントレポーティングシステム研修
<12ページに続く>

全国病児保育協議会 平成19年度決算報告

《収入の部》

	19年度予算額	19年度決算額	予算対比増減
前年度繰越金	9,370,436	9,370,436	
事業年会費	8,500,000	9,001,000	501,000
賛助会費	500,000	540,000	40,000
入会金	400,000	330,000	-70,000
マニュアル・テキスト等販売代金	1,000,000	2,745,350	1,745,350
雑収入	100	18,938	18,838
合 計	19,770,536	22,005,724	

《支出の部》

	19年度予算額	19年度決算額	予算対比増減	
事業費関係	研究大会補助金	2,000,000	2,000,000	0
	次期大会準備金	2,000,000	2,000,000	0
	調査研究委員会費	600,000	600,000	0
	広報委員会費	400,000	400,000	0
	研修委員会費	400,000	400,000	0
	運営委員会費	350,000	331,350	-18,650
	常任協議員会等会議費	1,500,000	1,274,520	-225,480
事務費関係	人件費	360,000	336,000	-24,000
	旅費	600,000	489,610	-110,390
	消耗品費	80,000	15,840	-64,160
	印刷費	3,000,000	1,929,955	-1,070,045
	通信費	300,000	151,425	-148,575
	ホームページ維持管理費	300,000	300,000	0
	雑費	30,000	405,361	375,361
予備費	1,000,000	300,000	-700,000	
合 計	12,920,000	10,934,061		
繰 越	6,850,536	11,071,663		

全国病児保育協議会 平成20年度予算

《収入の部》

	19年度決算額	20年度予算額
前年度繰越金	9,370,436	11,071,663
事業年会費	9,001,000	8,500,000
賛助会費	540,000	500,000
入会金	330,000	300,000
マニュアル・テキスト等販売代金	2,745,350	1,500,000
雑収入	18,938	1,000
合 計	22,005,724	21,872,663

《支出の部》

	19年度決算額	20年度予算額	
事業費関係	研究大会補助金	2,000,000	2,000,000
	次期大会準備金	2,000,000	0
	調査研究委員会費	600,000	700,000
	広報委員会費	400,000	500,000
	研修委員会費	400,000	500,000
	運営委員会費	331,350	350,000
	常任協議員会等会議費	1,274,520	1,500,000
機関紙発行準備費	0	1,500,000	
事務費関係	人件費	336,000	360,000
	旅費	489,610	600,000
	消耗品費	15,840	80,000
	印刷費	1,929,955	3,500,000
	通信費	151,425	300,000
	ホームページ維持管理費	300,000	300,000
	雑費	405,361	30,000
支部合同研修補助費	0	1,000,000	
予備費	300,000	500,000	
合 計	10,934,061	13,720,000	
繰 越	11,071,663	8,152,663	

<10ページより>

会の進行次第

研修(実習)内容の確認、役員の役割分担

第2回 調査研究委員会(平成20年秋 未定)

議事:①インシデントレポートシステムを用いたパイロット調査の検討

②平成15年度、平成17年度調査についての論文発表準備

(2) 調査

I. 「平成17年度病児保育事業実態調査」

平成15年度調査との統合と論文作成

(3) 研究事業

I. 病(後)児保育施設リスクマネジメントパイロット調査

インシデントレポートシステムの標準化に向けて、コンピュータソフトウェア利用の是非を検討、パイロット施設での仮運用

広報委員会(神原雪子委員長より)

①病児保育ニュースの発行(内1回は総会・研修会特集号)

8月(総会特集号)を含む年5回予定

②HPの拡充

支部紹介、関連の学会の情報・各ブロックや都道府県段階での取組の紹介

③広報関連資料の整備

④広報委員会開催

平成20年7月19日 三重

平成21年1月 予定

⑤学会での発表(医師等への広報)

日本小児科学会、保育学会などで発表

⑥研究大会の広報を保育看護の学会誌雑誌へ掲載

⑦企業など関連ある事業へ広報を行う

⑧編集委員会準備委員会として機関誌発行

(6)平成二十年度予算案(木野 稔運営委員長より)

平成20年度予算案について

収入の部については、事業年会費8,500,000円、賛助会費500,000円、入会金300,000円、マニュアル・テキスト等販売代金1,500,000円、雑収入1000円(これは主に銀行利息)、合計21,872,663円という予算にしております。

支出の部では、各委員会とも作業委員を増員し委員会活動の強化を図るために各100,000円増額しております。また機関誌発行の準備金として1,500,000円計上しております。支部合同研修会補助費として100万円を、予備費(主に法人化等将来構想関連費用)として50万円を計上しています。支出合計は13,720,000円となり、繰越は8,152,663円です。

全国病児保育協議会 平成20年度 予算(案)

11ページに掲載の予算(案)を参照

◆平成20年度事業計画および平成20年度予算(案)について、拍手で承認された。

(7)支部長会の報告(木野運営委員長より)

下記事項について協議確認されたので報告いたします。

・支部合同研修補助費を、地域特性を考慮して、1支部でも支給する。9月末を期限に申請を受け、厳正に審査する。研修会の予定はHP上でアナウンスし、結果報告は協議会ニュースに掲載する。依頼があれば執行部役員が支部研修会に参加することも可能。

・協議会未加入施設へ支部活動への参加を広く呼びかけて行く。第19回千葉大会、第20回東京記念大会では未加入施設への協議会入会の勧誘、大会のアナウンスを積極的にやっていく。

・年次的実態調査の必要性から、平成20年度のできるだけ早い時期に加盟全施設を対象に実態調査を実施する。回収率を上げるため、各支部で加盟施設への声掛けに協力していただく。それが難しい地域については協議会事務局も応援する。

・各委員会委員を役員以外からも広く募る。他薦自薦をお願いしたい。

(8)質疑応答

Q:マニュアルに掲載してある医師連絡票の病名分類におかしなところがあるか?

A:今年度中にマニュアルの改訂を予定している。その際見直したい。

Q:平成20年度に新しい保育所保育指針が告示された。“病児保育ならではの保育”のガイドライン作りが必要では?

A:平成20年度予算の予備費で、協議会法人化の検討ならびに認証制度の提案、の2つのプロジェクトチームを作る予定である。認証制度を考える上で、ガイドライン的なものが必要になってくることもあり検討していきたい。

Q:厚生労働省の考え方と利用者の認識に大きなギャップを感じる。署名活動をして頂きたい。

A:協議会としても、利用者の声を集めて病児保育室設置が望まれる地域の提案や、1000人以上の施設の必要性などを訴えたり、内部だけでなく社会への病児保育の広報にも力を入れていきたい。また、法人化して行政への発言力を上げていきたいと考えている。

(9)第19回 千葉大会について佐藤 好範会頭より説明

一、閉会挨拶(木野会長)

以上

全国病児保育協議会事務局

〒535-0022 住所:大阪市旭区新森4-13-17 中野こども病院気付

担当:藪田・堀込 電話:06-6952-4778 F A X:06-6954-8621